掲載日:2023年04月20日,面名:S206X0,記事ID:K2023042000000005500
(C)河北新報社

白石高生 希少性訴える

堀のバイカモ 工事から守る

市長「財産と再認識」

市、生息調査に協力明言

城下町の白石市に自生する水草「バイカモ(梅花藻)」を工事から守ろうと、地元の高校生が立ち上がった。宮城県の準絶滅危惧種に指定され、街中のお堀に自生するのは全国的に珍しい。「白石のバイカモは貴重」という生徒の訴えに市幹部は認識を新たにした。

(白石支局・岩崎泰之)

バイカモは多年草で、初夏に梅に似た白い花を付ける。白石高科学研究部の生物班は4年前に白石城の外堀の沢端川に自生するバイカモの研究を始め、生育条件を調べている。

「沢端川の洪水対策で市が川底を掘る浚渫工事を行うらしい」。そんな話が昨夏、部顧問の中村望教諭(39)から部員にもたらされた。「市は希少性を分かっているのか」と部内は動揺した。

清流の象徴でもあるバイカモを観光面でアピールする自治体もある中、白石では「ただの草じゃないの?」(市幹部)と関心は低かった。

工事に向けた市の調査が終わる今年3月まで、生物班の5人による「チームバイカモ」は現地調査し、プレゼン用のスライドも作った。中村教諭は植物の研究者らと連絡を取り合い、市との話し合いに備えた。

調査前は沢端川全域での工事も想定されたが、幸いバイカモの群生地は工事区間から外れた。ただ、今後も保護していくためには市との連携が欠かせない。中村教諭が研究者との話し合いに市幹部の参加を求めると、市から思いがけず「一緒に現場を歩きましょう」と前向きな返答があった。

今月10日、沢端川沿いに部員や市職員、生態学などが専門の黒沢高秀福島大教授(57)が集まり、現地を確認した。市幹部は「白石高の生息調査の際に工事の図面を貸してもいい。(必要に応じて)設計変更もする」と明言。今秋の工事に向けて部員と情報共有する方針も示した。

黒沢教授は「防災事業と生物保護は対立しがちな面があるが、今回はラッキーなケース」と振り返った上で、「バイカモの環境を広げれば防災に役立ち、観光資源にもなり得る」と市の取り組みに期待を寄せた。

部員はこれに先立ち、バイカモの保護と観光活用をテーマに山田裕一市長へのプレゼンも行った。山田市長は「市民の財産だと再認識させられた」とまちづくりに役立てる考えだ。

科学研究部の鈴木琳大郎部長(17)は「バイカモが貴重な観光資源になると再確認できた」と手応えを得た。中村教諭は「福島大からバイカモの遺伝子調査参加の誘いもある。生徒の頑張りを応援したい」と話す。

チームバイカモは市から工事図面が届き次第、生息マップづくりを始める。

白石高生と市や福島大の関係者らによる現地確認
=10日、白石市西益岡町の沢端川